Research Institute for World History
Newsletter
No. 25 July 2015
世界史研究所「ニューズレター」第25号（2015年07月）

CONTENTS

■「アジア諸国の世界史教育比較」第２回ワークショップ報告　南塚信吾 ——1 頁
■ AAWH 第３回大会（シンガポール）概観　南塚信吾 ——2 頁
■ AAWH シンガポール大会参加記　澤野理 ——3 頁
■ AAWH シンガポール大会に参加して　小林昭菜 ——5 頁
■ 鳥越泰彦追悼論集『新しい世界史教育へ』紹介　松本通孝 ——6 頁
■ RIWH アフリカ奨学金授与の報告 ——9 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

「アジア諸国の世界史教育比較」第２回ワークショップ（セブ）報告

南塚信吾

菱財団から助成を受けているプロジェクト「アジア諸国の世界史教育比較」は、昨年 11 月に東京で開いた第１回ワークショップを受けて、第２回のワークショップを 2015 年４月 24–26 日にフィリピンのセブで行った。参加者は、インド、インドネシア、ベトナム、フィリピン、中国、韓国、日本から、合計９名で、今回はシンガポールからの参加はなかった。

ワークショップでは、まず、第１回のワークショップで調整すべき点として確認されていた諸点が、各ペーパーに反映されているかどうかの点検を行い、ついで、全体として考え直して、イスラムからの視点が欠けていることを反省し、その対策を立て、そして、ペーパーの長さや書式の統一について、改めて世界史研究所から指示をすることにした。

第二に、ワークショップでは、各国の世界史教科書の「目次」の比較をし、アジア全体において 1990 年代から世界史の教科書の「改革」がさまざまな意味で進んできていることを確認したうえで、それぞれの教科書がどれだけナショナル・ヒ

ストリーを脱しているか、どれだけ西欧中心主義を乗り越えているかを点検しあった。

第三に、ワークショップでは、各国の世界史教科書に 1840–42 年の「アヘン戦争」がどのように記述されているかを比較しあった。「アヘン戦争」に直接に関与した国で詳細な記述がある半面、直接に関与しなかった国でも詳しい記述があったり、何らかの関係があったと思われる国の教科書にほとんど記述がなかったりするばらつきが確認できた。この種の比較研究は今後さらにさまざまなテーマを対象として発展的に継続されるといいと確認しあった。

このワークショップを終えて、6 月中ごろまでに各ペーパーの改訂版を提出し、それを世界史研究所で取りまとめ、編集することになった。その間、世界史研究所では、出版社と連絡を取って、技術的な統一のための「要領」を取りまとめ、全員に指示することになった。

アジア世界史学会 (AAWH) 第 3 回大会 ―シンガポール

南塚信吾

1. 全体的概観

AAWH の第 3 回大会が 2015 年 5 月 29–31 日にシンガポールの南洋工科大学において開催された。南洋工科大学は、工科大学とはいえ、数年前に設立された人文社会科学部が最大の学生を有し、その中でも歴史学科が有力で、しかも歴史学科の柱をグローバル・ヒストリーに据えているという大学である。

第 3 回大会の全体的テーマは、「グローバル・ヒストリーにおけるマイグレーション：人々、植物、疫病、港」というものであった。

基調講演は 3 本あった。羽田正氏は、明治以来の日本の世界史の概念の変化を追いかけたうえで、今日「新しい世界史」が求められているという持論を展開した。シンガポール大学の Wang Gungwu 教授は、地中海世界以来の世界史を国ではなく、大陸と海洋のような大きな地域的単位の興亡として論じたが、あまり成功したものとは言えなかった。P. マニング教授は、アジアにおける 70000 年以前から 1500 年ごろまでの移住の歴史を環境と絡めて概観し、それと今日の移民の動きとの対比を試みた。基調報告は、大会の全体的テーマを根拠づける位置を持つと思われるが、第 3 回大会の全体テーマに見合ったのは、マニング報告ぐらいであったように思える。

一方、セッション全体でみると、「マイグレーション」に関するものが、59 の内の 18 余りを占めていた。たとえば、「アジアでのマイグレーション」、「グローバル・マイグレーション」、「日本帝国内のマイグレーション」、「中国人のマイグレーション」、「中東からラテンアメリカへのマイグレーション」、「女性のマイグレーション」、「マイグレーションと定住」、「マイグレーションと国家形成」、あるいは「知識の形成とマイグレーション」といった具合である。ただ、「マイグレーション」に連関するサブ・テーマとしては、「植物、疫病」といったサブ・テーマはあまりいかされていなかったように思われる。

2. 比較セッションについて

世界史研究所が関与する「アジア諸国における世界史教育の比較」のセッションについて言えば、3、4 年越しの共同研究の成果の報告ということもあって、アドホックなセッションとは違う重みがあったように思う。

まず南塚が「総論」的な報告をして、アジア諸国における戦後の世界史教育の歴史を比較し、現在のカリキュラムの構成を比較し、最後に各国の世界史教科書が「アヘン戦争」をどのように記述しているのかを比較してみた。いずれもこれまでの共同研究の成果をとりまとめたものである。注目されるのは、ヨーロッパ中心主義の克服や自国史と世界史の区分の克服といった点でのばらつきであり、その中でも韓国の「先進」ぶりである。

ついで、シンガポールのシムさんが、1965 年以後のシンガポールにおける世界史教育の変化を詳細に報告した。シンガポールが、たえずアジア史ないしはアジア国際関係史のなかで自国史を考えようとしてきていることがうかがえた。ここでは、自国史と世界史という区分はないが、全体としてヨーロッパ的視線で歴史を見ている傾向が強かった。

最後にフィリピンのフランシス・ゲアロゴさんが、戦後のフィリピンにおける世界史教育の発展を説明した。フィリピンの世界史教育はアメリカ合衆国の影響をかなり強く受けていて、世界史の構成も欧米的であり、また教科書も商業ベースで発行されていて、自由であると言う。

質疑では、アヘン戦争についての記述が国ごとに違っていたり、全く記述のないところがあったりするのは、どうしてかという問題が出されたり、かなり熱心な意見が戦わされた。

このセッションがその一部をなすわれわれのプロジェクトの出版を強く促す参加者が多く、私たちも大いに励まされた。

アジア世界史学会 (AAWH) シンガポール大会参加記

澤野理（神奈川県立寒川高等学校）

標記大会は，2015 年 5 月 29 日から 30 日の 3 日間シンガポールの南洋工科大学で開催された。筆者にとっては，第 1 回大阪大会 (2009 年)，第 2 回ソウル大会に続き 3 回連続の出席となった。これらの大会で筆者の組織するパネルは，アジアの歴史を切り口として日本の高校における 2 つの歴史系科目，すなわち「世界史」と「日本史」の相互乗り入れの可能性 (第 1 回；「明治維新を世界史の中でどのように教えるか」)，および高大連携事業によって得られた知見を，実際の高校現場にどのように反映させるか (第 2 回；「19 世紀のアジア史をどのように教えるか」) という問題について扱った。

今回は，大会全体のテーマである "Migration in Global History" に即して，9 世紀以降の日本

とアジア諸地域の交流史から前近代・近世・近現代の各時期 1 つずつ事例を取り上げ，高校現場における実践例を交えて報告した。その目的は，第 1 回大会同様，世界史と日本史の相互乗り入れの可能性 (それは必ずしも新科目の設置を意味するものではない) について報告することである。大会冒頭の基調講演でも東京大学の羽田正教授が，日本の歴史教育における日本史と世界史の分断という問題を報告しており，両者の壁を取り払わなければならないという問題意識は，大学・高校に共通したものであることを実感した。

我々のパネルは，大会初日午後のセッション 1 の中に設定されていた。筆者による問題提起に続き，3 名のパネリストが報告を行った。前近代の事例は，山内晋次氏 (神戸女子大学教授) の「前近代のアジアにおける日本の硫黄輸出と世界史」で，9 世紀から 16 世紀にかけて日本から輸出された薩摩硫黄島 (鬼界ヶ島) の硫黄が同時代の東アジアの軍事情勢に大きな影響を与えたことが報告された。近世の事例は，佐藤雅信氏 (前神奈川県立横須賀大津高等学校教諭) の「媽祖が日本にやって来た」で，中国南部発祥の航海女神である媽祖がいわゆる「鎖国」以降に日本へ伝来したことと中国における明清交替 (華夷変態) との関係や東日本における受容過程が報告された。また，媽祖の伝来時期を踏まえて，同時代の中国文化が元禄文化に与えた影響を見直すべきであるという提言もなされた。ただし，残念なことに佐藤氏自身が急病のため大会を欠席し，神田基成氏 (鎌倉学園中学校・高等学校教諭) による発表原稿の代読という形での報告となってしまった。近現代の事例は，福本淳氏 (栄光学園中学校高等学校教諭) の「横濱中華街の形成と変遷」で，幕末期における中国人居留地の形成から現在の中華街への変遷過程が同時代の日本史・中国史と関連づけた視点で報告された。3 名の報告の後，飯岡直子氏 (シンガポール大学でアンソニー = リード氏に師事) のコメント，質疑討論と続いた。同じ時間帯に 8 ～ 9 のパネルが設定されているため，参加者が分散したが，我々のパネルの出席者は 10 名程度であった。しかし，高校教員主体のパネルには珍しく日本以外からの研究者の出席が多く (ソウルでは 1 名であった),「媽祖と観音の習合」や「旧華僑と新華僑の関係」などについての質問が寄せられた。

なお，大会 2 日目午前のセッション 2 では，高等学校におけるアジア史の授業法についてのパネル (川島啓一同志社中学校・高等学校教諭が組織)，午後は日本における歴史系の新科目設置の動きとそれに対応する大学におけるアジア史の教育法についてのパネル (桃木至朗大阪大学教授が組織) があり，偶然かも知れないが，その気になれば日本の高等学校と大学における歴史教育の現状と将来の展望について幅広い情報を得られるプログラム構成であったことも記しておきたい。ともあれ，木曜日の午前中まで高校で授業をしてから深夜便で現地へ飛び，着いた日の午後にパネル発表，日曜の昼には現地を発ち，翌月曜の朝から高校の授業という強行軍を何とかこなせたことに一安心している。3 年後の長春大会の頃には，次の学習指導要領が具体化していることであろうから，それに向けての新たな構想も練らなければな

らないだろう。最後に，大阪大学歴史教育研究会代表の桃木至朗先生と事務局の皆さんからは，前回のソウル大会に続き，様々な形でのご支援・ご助言をいただいた。ここに深く感謝の意を表することで本稿を結びたい。

AAWH シンガポール大会に参加して

小林昭菜（法政大学大学院政治学研究科博士課程）

2015 年 5 月 29 日から 31 日まで、The Asian Association of World Historians 第 3 回研究大会がシンガポールの南洋工科大学で開かれた。筆者は、これまでの AAWH 大会（第 1 回大阪大会と第 2 回ソウル大会）に聴衆として参加、毎回多くの研究者の報告に刺激を受けてきた。そして、いつかこの大会でパネルセッションを行いたいと考えていたところ、「グローバルヒストリーにおけるマイグレーション」をテーマとするシンガポール大会が開かれると聞き、ぜひ発表をしたいと思い応募した。

私たちのセッションでは、「戦後ソ連の日本人捕虜」をテーマに、イギリス、ロシア、日本で活躍する若手研究者 4 名が、日・英・露の史的史料に基づき、最新の研究成果を報告した。このセッションの特徴は、最初の 2 名が収容所システムと収容所生活を、そして残りの 2 名が祖国帰還後の歴史を説明し完成した点にある。

モスクワのロシア史研究所で最近博士論文を出したばかりのセルゲイ・キムは、ソ連の捕虜収容所システムについて説明した。また、日本人捕虜の労働使役を、ソ連政府は当初「ローコスト・ハイレベニュー」と考えていたが、食料供給が徹底できず、高い死亡率を生み出したと批判した。また抑留自体、ソ連の経済復興のためではなく、政治的理由が原因であると述べた。彼の報告は、80 年代や 90 年代の先行研究には見られない視点があり興味深かった。筆者は、法政大学で 1 月に提出した博士論文の中から、日本人捕虜に対する収容所での共産主義教育について報告した。ロシアのアーカイブスでは、ソ連のプロパガンダ教育に一定の成果があったと評価されているが、米国の帰還者調査データでは、「赤化」者はピーク期でも半数以下であり、概して米国がその脅威を想定したほど帰還者は危険な存在ではなかったと報告した。モスクワ音楽院を修了した音楽学博士の森谷理沙は、日本の歌謡曲とロシア民謡の接点に注目し、日本歌謡の起源に戦後の抑留史が関係していることを報告した。日本歌謡界の作曲家として名を残した吉田正は、ソ連抑留を経験したことで、ロシア民謡に影響を受け、帰還後はその経験を基盤に作曲活動をしていたという。音楽学の視点から抑留史にアプローチした研究は世界で類例がなく、本セッションの特色をなす報告であった。ケンブリッジ大学の博士課程にいるシェルゾッド・ムミノフは、ソ連からの帰還者が日本社会に与えた影響を、日本語の史料から解析した。中華人民共和国が建国された年であり、ま

た、ほとんどの捕虜が帰還した年の 1949 年を、アジアに冷戦が持ち込まれた重要な年として位置づけた。帰還者は戦争と抑留を背負った英雄でありながら、戦後日本社会の反ソ・反共差別に苛まれた、いわゆる米ソ冷戦の犠牲者であると指摘、抑留史や本セッション報告を統括する問題を提起してくれた。

質疑では、捕虜問題が世界共通のテーマであることを痛感させた。米国の日本人収容所のケース、朝鮮戦争時の巨斉島収容所のケースとの比較について質問があった。しかし、ソ連という独自の社会システムを持った国の場合、他国と比較することは難しく、政治体制やスケールが異なることから、議論というよりもやや情報交換の場となったが、捕虜問題を国際的に考えるためには非常に勉強になる切り口であった。また、コメンテーターの南塚信吾先生からは、日本人捕虜の抑留史が日本社会や日本人にとって重要であると同時に、戦後のアジア体制を考える上でも一つの重要なテーマとなるとのご意見を頂いた。また、私たちの報告で今後改善すべき点もアドバイスをいただいた。終了後はパネリスト皆で話し合い、このセッションをスタートに、今後も継続して共同研究を続け、英語で日本人捕虜の歴史を発信していこうとの意見で一致した。今回、発表の機会を与えてくれた AAWH、そして大会組織委員会、南洋工科大学、そしてコメンテーターを務めて下さった南塚先生には心から感謝を申し上げたい。

鳥越泰彦追悼論集『新しい世界史教育へ』の紹介

松本通孝　（立正大学非常勤講師）

鳥越泰彦さんは、1990 年に麻布学園の歴史教師に迎えられてから、世界史を中心とする授業の他、校務分掌・部活などの毎日の教育実践をこなしながら、数々の研究会活動や世界史教科書の編集に携わるなど中堅の教員の核として活躍して来られた。

2014 年 3 月 29 日、麻布学園と韓国の養正高校との国際交流行事引率の最中に急性心不全のため鳥越さんは帰らぬ人となった。彼の歴史教育論の延長に位置づけられる学校行事の最中であった。同僚教師、生徒、OB たちの驚きと悲しみは如何ばかりであったか、想像に難くない。私たち、様々な歴史教育に関わる研究会を通して、鳥越さんと議論し、情報交換をし、これからの世界史教育のあり方を語り合ってきた仲間にとっても同様であった。

鳥越さんの歴史教育論、世界史教育論およびその実践は、今まで私たち世界史教師が内々に抱え、試行錯誤していた諸問題を明らかにし、先頭に立って理論化し、実践しようとしていた。その中にこれからの方向性を暗示する普遍的な問題提起を内包していたのではないだろうか。特に大学紀要などの雑誌論文に発表していた諸論文は、彼の本音とこれからの方向性を包含しており、このままでは一般の歴史教育者の目に触れることなく埋没してしまう危惧があること、彼が体を壊してま

で心血を注いできた数々の問題提起を、歴史教育・歴史研究に携わる者の間で共有できる方向にしたいという声が自然発生的に上がってくる中で、追悼論集の企画がたてられた次第である。

40 代の後半という年齢からして当然のことであるが、彼の提起している諸問題は、いずれも結論が出ている問題ではない。鳥越さん自身がこれからの歴史教育者・研究者としての人生の中で追求しようとしていた問題の提起であったと思う。遺された私たちが、鳥越さんと会話をしながら、彼の提起した諸問題を共有しながら、追及して行くべき課題と思われる。

1989 年の学習指導要領改訂により高校「世界史」が必修となってから、早や 25 年が経とうとしており、その間 2006 年秋には世界史未履修問題が明るみに出て、高校生の地理歴史教育はいかにあるべきかが問われてからも、既に 9 年目を迎えている。その間、歴史教育の現場から、また歴史教育者・研究者の間から、さまざまな改革案が提起されてきた。しかし、高校の歴史教育の現場、大学にとっても、また、文部科学省にとっても、これからの世界史教育はいかにあるべきかについて、まとまった方向性は出しえないでいるのが現状である（2015 年春段階）。

そのような世界史教育を取り巻く困難な状況の中で、21 世紀を生きる生徒たちにとって、どのような歴史を見る目が必要なのか、そのためにはどのような授業形態が望ましいのか、どのような力を養えばよいのか、などなど生徒に視座を置いた様々な角度からの提言がなされてきた。その中の一人に、鳥越康彦さんは位置づけられていると思う。

彼は、麻布学園の教師になった時から、高校の世界史教科書の分析および編集に取り組んでいた。戦後直後からの世界史教科書に目を通し、その分析から日本の世界史教科書に欠けている地域、世界史教科書の中での日本史記述、世界の一体化を描く記述・構成、などを鋭く指摘し始めた。彼の提言のいくつかは、現在の教科書では是正されていることから見ても、彼の先見性を窺い知ることができる。

彼の出発点は、戦後の世界史教科書の分析にあり、その中で、学習指導要領の世界史像の変化は、教科書レベルで起きていた世界史像の変化を後追いするものであったと分析し、今までの学習指導要領の変遷でもって、世界史教育の変遷をとらえる研究姿勢を批判していた。その中で、日本の世界史教科書は様々な欠点を包含しつつも、それら

を克服しながら現在に至っており、内容的には世界的に見ても優れたものになってきていることを論じる一方、学習指導要領ですら課題の提示、調べ方・発表の薦め、世界史の扉の利用、発問など歴史教育の方法論の再考を呼びかけているにも拘わらず、教育現場が相変わらずの講義形式、板書・穴埋めプリントから抜け出していない現状に対して、「世界史を学ぶことにより、高校生はどのような学力をつけるのか」と生徒が主体的に学ぶ授業を提起しており、そのためにも教師自身が主体的に考えることの大切さを説き始めていた。

次いで、彼は日本における世界史教科書のあり方を国際比較の中で検討するという方向に向かった。日本における世界史教育を他国の歴史教育との比較の中で相対化する試みである。彼は、その過程で、外国の歴史教科書から多くの示唆を得て行く。教科書の編別構成のみならず、本文と史資料との関係、教科書叙述の中の発問の問題、日本のゴシック体に見られる教科書執筆者側からの重要単語の指定などなど、私たちがごくごく当たり前に捉えてきた教科書スタイルの再検討を呼びかけたのである。見方を変えて論ずると、現在の「上から目線」の歴史教育ではなく、21 世紀を生きる生徒たちにとって、どのような「歴史を見る目」が必要とされているのか、そのためにはどのような授業形態が望ましいのか、どのような力を養えば良いのか、など生徒に視座を置いたさまざまな角度から世界史教科書・世界史教育を考えなおそうという提言であった。

それと同時に現実面では、2006 年の世界史未履修問題以来の地歴科の必修問題に関して、日本学術会議の提言を活かす形で協力し、問題の本質を単なる未履修ではなく、その背景に存する高校世界史教育の現場にあると捉え、世界史教育に日夜苦労されている現場の教師が積極的に発言すべきとして、暗記中心の授業に対し、重要語句を削減することにより内容を少しでも軽減できないだろうか、余裕のできた時間を使って少しでも歴史的思考力を培う授業が出来ないだろうか、また全国一律に同じ内容の教科書を使うのではなく、グレード別の教育の可能性はないのだろうかなどなど、今までの歴史教育をごくごく当然のものとして受け入れていた私たちに対して、鋭く問題提起をぶつけてきた。詳しくは、本書の該当部分を参照していただきたいと思う。

この遺稿集では、今までの問題提起を、実際の中高における歴史や総合の授業や大学における地歴教育法・外国史の講義の中で、どのように具現化しようとしていたかを、彼の作成した夥しいプリント類の中から抜粋し掲載した。また、彼の同僚、生徒たち、研究仲間からの鳥越評も語ってもらった。彼が、生徒たちから、同僚から、研究会仲間から、どのように評せられていたかを窺い知れるよう工夫した。

この論集は、いろいろな方向にアンテナを張り巡らせて、いよいよこれから方向性を絞って行こうとしていた最中に急逝された鳥越さんの世界史教育、世界史の授業、教科書に対する情熱を、私たち問題点を共有していた仲間（小川幸司、日高智彦、松本通孝、吉嶺茂樹）の手によって、これからの課題としてまとめ、問題を提起する書として、かれの意図を探る方向で編んだものである。

毎日の授業に苦労されている先生方、これから世界史教育を志そうとしている若き学生諸君、これからの世界史教育のあり方を真剣に考えておられる歴史教育・歴史研究に携われている先生方に特にお薦めしたいと信じ編集した。是非、それぞれ置かれた場において、鳥越さんはこう語っていたが、私はこう思うと声をあげて欲しい。それこそが、彼が一番望んでいた方向だと私たちは信じている。そのような思いを込めて、遺された私たちが、鳥越泰彦さんといつまでも会話をしながら、彼の提起した諸問題を共有しながら、追及して行きたいと思い本書を世に送った次第である。以上でもって、遺稿集の紹介とさせていただきたいと思います。

RIWH アフリカ奨学金（第三期）授与の報告

皆さまの篤志に支えられ、2015 年春から「RIWH アフリカからの世界史賞 RIWH Award for World History from Africa」第三期の給付を開始することができました。ご寄附をお寄せいただいた皆さまには、深くお礼申し上げます。

前回同様、ナイジェリアのイロリン大学人文学部歴史および国際研究学科において、受給学生の募集と同学科の先生方による選考が行われました。論文審査の結果、の受賞者として以下の 3 名の方が決定しました。

・Muhammed Jamaldeen Abdullahi さん（27 歳）
・Ibrahim Olabode Raji さん（22 歳）
・Olalekan Gbolahan Olayinka さん（21 歳）

受賞者の方には、賞状と奨学金 1,500 ドル（USD）を送りました。授賞式の模様は下のとおりです。

ご寄附をお寄せいただきました皆さまのお名前を以下に掲載させていただき、あらためて、お礼申し上げます。

浅尾敦子、東誠、池田裕子、伊藤定良、稲野強、長見有方、木畑洋一、黒田忠男、後藤麻希子、紺道樹義、斎藤徳博、島利夫、蓮沼泰子、南塚信吾、山本明代、油井大三郎、渡邊昭子（敬称は省略させていただきます。）

今後ともご理解、ご協力をお願い申し上げます。

お知らせ

世界史研究所ウェブサイトに関するお詫びとアドレス変更について

世界史研究所では、研究所ウェブサイトを通じて電子化された世界史研究の情報の収集・発信を行っていますが、昨年、千葉大学に設置されていたサーバーがサイバー攻撃を受け、データが損失し、サーバーの移転を余儀なくされました。皆さまにはご迷惑をおかけしていますこと、深くお詫び申し上げます。新ウェブサイトのアドレスは、以下のとおりです。現在、簡易ページで運用中です。

新 URL： **http://www.npo-if.jp/riwh/**

今年 9 月末を目処に、抜本的なサイトのリニューアルを予定しております。それまでの間、簡易ページのみの閲覧となり、引き続きご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。なお、世界史研究所「ニューズレター」のバックナンバー各号に関しましては、新ウェブサイトより PDF 版がダウンロード可能です。

今後とも、当研究所ウェブサイトにご愛顧を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2015 年 07 月 20 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）